

「遊び」の言葉から教育活動を考えてみて

ある障害児のケース検討会に顔を出した。「遊びの指導」時間での係わりについての話題提供であった。ケース検討はさておき、この機会に、私なりに「遊び」の言葉から教育活動を考えてみた。

「遊び」とは、では何かということであるが、「遊びは、喜び、楽しさ、おもしろさを求める（それ自体を目的とし、活動の過程そのものを楽しむ）活動 自由で自発的な活動 活動自体が目的で非日常的活動 日常の現実経験に根ざしながら日常生活を離脱した活動。（清水,1983）」と定義され、また、「遊びを指導するのは自由遊び－自由保育－、遊びで指導するのは課題遊び－設定保育－（伊勢田,1999）」ということのよう。

つまり、子どもが自己実現（生命活動拡大行動）と感じられる活動であれば、自発的に主体的に取り組むであろう。

要は子どもは、その時点の自ら身につけている力（エネルギー、各領域の発達段階の能力、等々を含め）を総動員して未知なる外界（人との係わり合いも含め）の領域（学習）にチャレンジしているという充実した時間が過ごせるかどうかと思う（仲間と集団で行うことで楽しさが倍増するからこそ、仲間が意識されてくるものと思う）。それ故、自然発生的に生じるこの種の活動は、「子どもの発達全般を捉える視点を提供（北島,2003）」してくれ、正に指導へのヒントを得ることができると思う。正に、子どもと係わり合う「教育活動」そのものが、「遊びの指導」時間にもあり、「遊びの指導」という言葉をあえて使う必然性はないと思う。

子どもの活動（学習も含め）に対する動機付けへの工夫、環境整備は、教師として行うことで、あくまで活動するかどうかは、子どもが選ぶことである。そこをしっかりと踏まえておけば、「遊びの指導」の時間が終わった後、「先生、もう遊んでいいですか？」と子ども聞かれるようなことは起こらないだろうと思う。

「養護学校学習指導要領解説－各教科、道徳および特別活動編－、領域・教科を合わせた指導、「遊びの指導」欄に、その指導内容解説の一文はあるが、よく読むと私の上記のコメントと何ら矛盾を感じなかったが……。

要は、どの時間帯でも子どもに係わり合う側が、目の前の子どものどの行動をどう拡大してもらうためにどう工夫するかどうかであると思う。

（2004年09月26日記）